



新橋小学校

# 学校だより

令和6年2月29日

令和5年度 第11号

## 「あって当たり前」の違いを乗り越えて

校長 西尾 琢郎

またしても私ごとからの書き出しで失礼いたします。昨年秋の運動会前からはじまった目の患いが、思いのほか重篤なものになってしまい、10月、12月の入院手術に続き、新年早々に再入院、そしてさらに2週連続の手術を受けておりました。医師からは、ようやく患部が安定してきたので、この先は最低限の安静を保ちながら気長に視力の回復を待つよう指示されましたので、さる2月19日、職場に復帰いたしました。長らく学校を留守にし、子どもたち、そして皆さまには大変なご心配、ご迷惑をお掛けしましたこと、心よりお詫び申し上げます。

この長い休みの間、治療上の制約から、読み書きなどの目を介して行う活動がほとんどできませんでした。テレビやラジオの音声を聞いたり、電子ブックやネット上のコンテンツを読み上げ機能で聴いたりといったことが、情報を手に入れる主な手段になっていたのです。多くの場合、人は目から大半の情報を得ていると言われます。割合にしてなんと8割以上が視覚経由だという研究もあるそうです。

しかし、視覚と言っても、それを使って何をどのように知覚するかは人によって異なります。文字を通じた理解に長けた人もいれば、映像や実体験などを通じた空間認識に長けた人もいます。「長けた」に留まらず、ある方法では理解できても、他の方法では極めて理解が難しいなど、認知に大きな偏りを持つ人も決して珍しくないのです。学校ではこれまで「多数派の認知特性」を前提にした一斉指導を行ってきましたが、前記のようにそれ以外の認知特性を持った子どもたちにとって、それでは十分な学習ができなかったり、場合によっては大きな精神的苦痛を覚えてしまっていたりしたことが、近年ようやく理解されるようになってきました。長い間、学校での学びの中心となってきた「読み書きそろばん」も、実はこの認知特性によって得手不得手が大きく分かれたり、あるべき習得方法が人によって違ったりするものだったのです。

現在推進されているタブレット端末による学びには、そうした状況への対応という側面もあります。板書をノートに書き取ることもこれまで非常に重視されてきた指導の一つですが、手書きのノートテイクとタブレットによる板書の撮影のどちらが学習にとって有効か、という問いの答えも、実は子ども一人ひとりにとって違います。必要なのは、自分にとって効果的な手段は何かを体験的に知り、選び取っていくことです。つまり、外形的な行動を一律に良い、悪いと判断するのではなく、その子にとって何が最善かを子ども本人と一緒に考えながら実践していくことが大切なのです。

他人の行動を不満に感じたり、攻撃したりするのは、事実でない思い込みも含めて、実は「自分もそうしたいのに我慢している」ことが背景にあります。私にはそれが、これまで学

校が行ってきたような「認識の多様性」を無視した指導のあり方に起因しているように思えてなりません。「みんなが我慢しているのだから、あなたもそうしなくてはならない」という理屈です。もちろん集団生活の中では、そうした態度が必要な場面もあるでしょう。しかし、ここまで書いてきたように、我慢すべき（またはそうすべき）行動は、必ずしも誰にとっても同じではありません。ですからそれが必要な範囲（他者に具体的な害を与えるなどの理由——これは絶対に譲れない一線です）を超えて個を押しつぶしてはいけません。

これからは「我慢」ばかりに縛られない、自分なりの学び方の必要性を、子どもが自身の頭で考え、他人に説得力をもって説明できるかどうかを大切にしていきたいです。こうした取り組みを習慣化することが、一人ひとりの子にとって最適な学びにつながり、また同時に、自他の違いを認識し、不平や不満を他者に向けるだけでなく、自分自身と向き合うことで前へ進んでいこうとする態度を育てていくと考えているからです。

誰にとっても正しいこと、というのが幻想に過ぎないことを、今日の現実世界は私たちに突きつけています。なぜ戦争が起こり、そして止めることができないのか。私はベッドの上で、そのことをずっと考えていました。人にはそれぞれの正義があり、自由があります。それらを本当に大切にしたいと願うのなら、自分の正義や自由と、他人の正義や自由を、同じように尊重し合う必要があります。人間一人ひとりの思いがそれぞれに異なる以上、AとBという思いが衝突した際にすべきなのはAかBかを争うことではなく、AもBもが最大限に生かされるようなCを見出していこうという姿勢ではないでしょうか。

子どもたちの日常と、世界で繰り広げられる争いは、決して別次元の話ではない、と私は考えています。子どもたちが、私たちにはこれまで為し遂げられなかった、争いを乗り越えて共に生きていくことのできる未来を創り出していけるよう、力を尽くしていきたいと思えます。

一年間本当にありがとうございました。来る新年度も、新橋小学校をどうぞよろしく願います。